

図表14 ベースラインケースにおける日本のマクロ経済の姿

【マクロ経済の姿】												
(%程度)、[対GDP比、%程度]、兆円程度												
年 度	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
実質GDP成長率	(▲0.3)	(▲5.2)	(4.0)	(2.4)	(2.1)	(1.7)	(1.4)	(1.2)	(1.0)	(0.9)	(0.8)	(0.8)
実質GNI成長率	(▲0.1)	(▲4.1)	(3.6)	(1.9)	(1.9)	(1.6)	(1.3)	(1.2)	(0.9)	(0.7)	(0.7)	(0.6)
名目GDP成長率	(0.5)	(▲4.2)	(4.4)	(2.2)	(2.0)	(1.7)	(1.5)	(1.4)	(1.2)	(1.1)	(1.1)	(1.0)
名目GDP	559.7	536.1	559.5	571.7	582.9	593.0	602.2	610.7	618.2	624.9	631.6	638.1
1人当たり名目GNI成長率	(0.8)	(▲3.9)	(4.2)	(2.5)	(2.4)	(2.3)	(2.1)	(2.0)	(1.8)	(1.6)	(1.6)	(1.6)
1人当たり名目GNI (※万円)	461	443	462	473	485	496	506	516	525	534	543	551
潜在成長率	(0.9)	(0.8)	(1.0)	(1.0)	(1.0)	(1.0)	(1.0)	(0.9)	(0.9)	(0.9)	(0.8)	(0.8)
物価上昇率												
消費者物価	(0.5)	(▲0.6)	(0.4)	(0.3)	(0.4)	(0.6)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)	(0.7)
国内企業物価	(0.1)	(▲1.8)	(0.7)	(0.6)	(0.5)	(0.5)	(0.5)	(0.5)	(0.4)	(0.5)	(0.5)	(0.5)
GDPデフレーター	(0.9)	(1.0)	(0.3)	(▲0.2)	(▲0.1)	(0.0)	(0.1)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)	(0.2)
完全失業率	(2.3)	(3.1)	(2.7)	(2.4)	(2.4)	(2.5)	(2.5)	(2.6)	(2.6)	(2.6)	(2.7)	(2.7)
名目長期金利	(▲0.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.1)	(0.2)	(0.6)	(1.1)	(1.4)	(1.5)	(1.5)
部門別収支												
一般政府	[▲3.1]	[▲13.0]	[▲7.8]	[▲3.7]	[▲3.1]	[▲2.6]	[▲2.1]	[▲1.7]	[▲1.5]	[▲1.5]	[▲1.5]	[▲1.7]
民間	[6.6]	[15.8]	[11.1]	[7.3]	[6.7]	[6.2]	[5.5]	[5.1]	[4.8]	[4.7]	[4.6]	[4.8]
海外	[▲3.5]	[▲2.8]	[▲3.3]	[▲3.6]	[▲3.6]	[▲3.5]	[▲3.4]	[▲3.4]	[▲3.3]	[▲3.2]	[▲3.1]	[▲3.1]

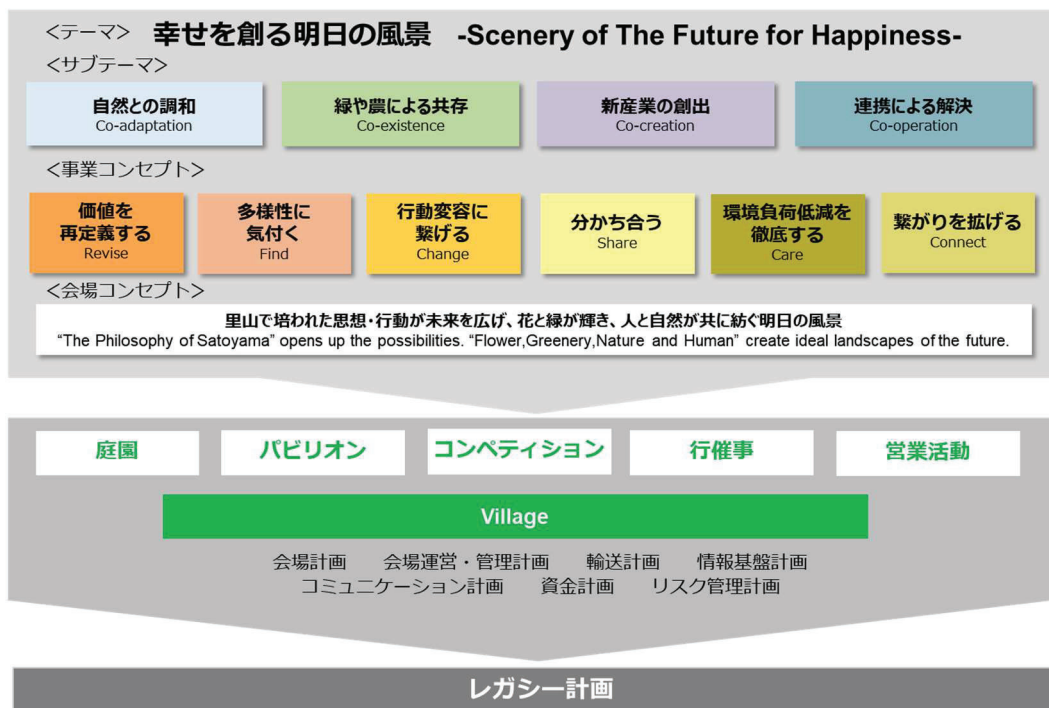
資料：内閣府「中長期の経済財政に関する試算予測」

5. 横浜国際園芸博覧会の影響

横浜国際園芸博覧会の概要

横浜国際園芸博覧会は、国際園芸家協会（AIPH）の国際園芸博覧会で、博覧会国際事務局（BIE）認定の国際博覧会である。開催時期は2027年3月～9月の6カ月間、会場は横浜市瀬谷区の旧上瀬谷通信施設の跡地で、会場面積は約100ha、参加者規模は1,500万人以上を計画している。2021年時点のテーマは「幸せを創る明日の風景 -Scenery of The Future for Happiness-」である。

図表15 横浜国際園芸博覧会の事業の全体概略



資料：横浜市都市整備局「横浜市における計画案の検討状況」2021年3月

国際花と緑の博覧会（大阪花博）の影響

1990年4月1日～9月30日に開催された国際花と緑の博覧会（大阪花博）は、花き産業の成長に大きく貢献した。世界から83カ国と55の国際機関、212の企業・団体が参加し、総来場者数は約2,313万人に及んだ。

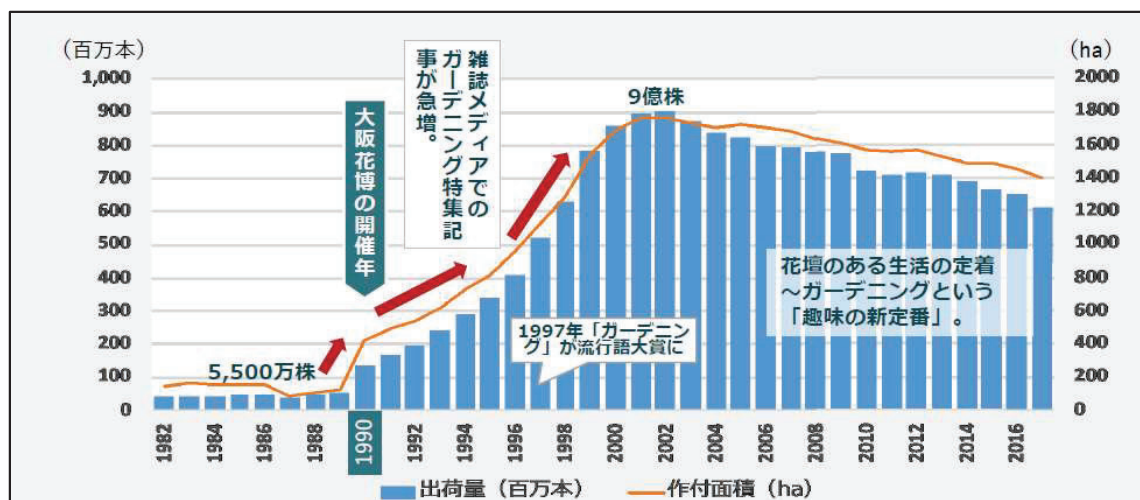
大阪花博は、開催後に多くの雑誌・メディアでガーデニングが取り上げられたこともあって「ガーデニングブーム」の起点となったと考えられている。特に、花壇苗需要の増加にインパクトを与え、その生産量は1989年の5千5百万株から2002年の9億株と12年で16倍に増加した。

令和元年度の事業の報告によると、ガーデニングブームは、以下の4つのステップがあったと述べている。萌芽期は大阪花博の開催直後（1990～92年）で、花壇苗の出荷量・作付面積が徐々に増加した。浸透期はマスメディアが英国風イングリッシュガーデニングに注目し、特集記事が急増した時期（1993年以降）で、花壇苗の出荷量・作付面積が急増し、その後の普及期（1996～2000年）につながった。成熟期はピーク（2002年）から現在までの期間で、生活の中にガーデニングが定着し、花壇苗の出荷量・作付面積は緩やかな減少傾向にある。

このように、大阪花博はガーデニングブームの始点になったが、マスメディアが取り上げるようなトピックスが存在したことがその後の定着につながった。今日、インターネットの普及に伴ってメディアの在り方も大きく変わっている。個人の田舎暮らし経験が動画として情報発信されて国内外の人々の関心を集めているように、有名・無名のインフルエンサーが花き産業の将来に影響を及ぼす可能性がある。

横浜国際園芸博覧会でもガーデニングに代わる新たなトピックスが求められる。そのためにも、国内外から花きに関する様々な提案を受け入れる柔軟性が必要であり、その後の産業化につなげるような戦略が肝要となる。

図表16 花壇苗の出荷量と作付面積の推移



出所：国際園芸博覧会検討会資料「国際園芸博覧会の経済波及効果等」

花き産業の振興につなげる取組

横浜国際園芸博覧会では、国際園芸博覧会の核をなす高品質な花きや栽培植物、各国・各地の魅力的な植物、最先端の育種技術などの優れた技術の展示が想定されている。

また、生け花、盆栽、門松等、世界に誇る花きに関する伝統文化や、最新のフラワーアレンジメント等の楽しみ方を紹介することで、花きに関する伝統を承継し、花きの文化を振興することが国民の心豊かな生活の実現に資することを伝えていく。そして、商品としての花だけではなく、生産から流通、販売までの「花きのサプライチェーン」を展示していくことが、花き産業全体の活性化にとって重要だと考える。

6. 花き産業の現状

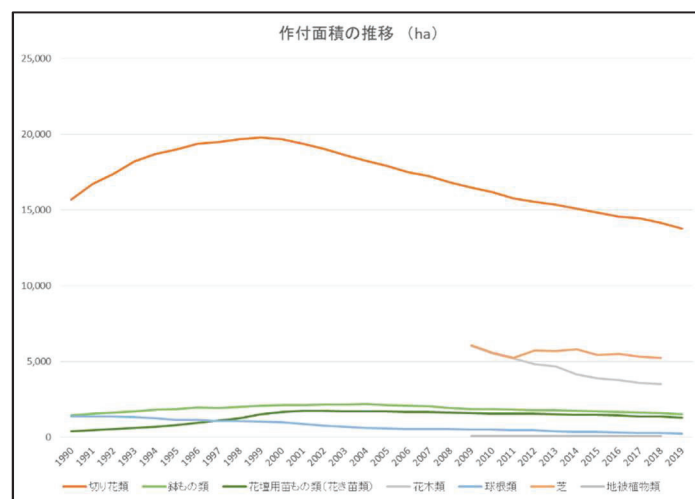
（１）作付面積（花木等生産状況調査）

切り花の作付面積は、1999年の約19,800haをピークとしてその後は減少が続き、2019年には約13,800haまで減少した（約30%減）。

鉢ものの類の作付面積は、2004年の約2,195haをピークとしてその後は減少が続き、2019年には約1,549haまで減少した（約26%減）。

花壇用苗ものの類の作付面積は、2002年の約1,768haをピークに減少が続き、2019年には約1,327haまで減少した（約26%減）。

図表17 作付面積の推移



資料:農林水産省「花木等生産状況調査」

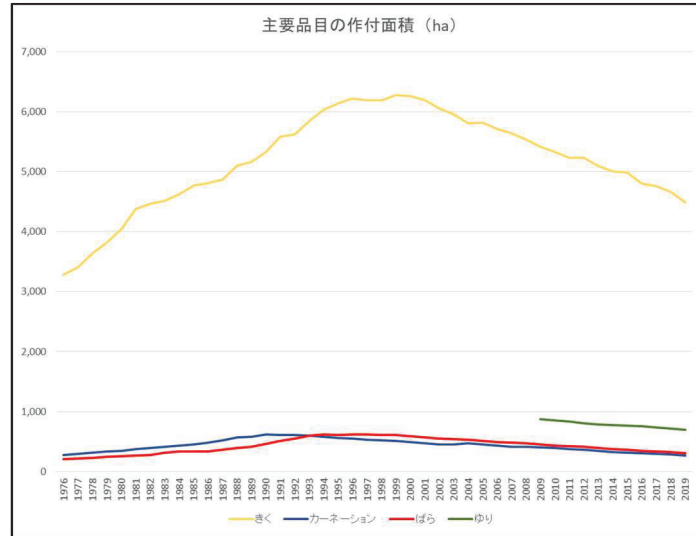
キクの作付面積は、1999年の約6,280haをピークとしてその後は減少が続き、2019年には約4,490haまで減少した（約29%減）。

カーネーションの作付面積は、1990年の約616haをピークとしてその後は減少が続き、2019年には約271haまで減少した（約56%減）。

バラの作付面積は、1997年の約617haをピークに減少が続き、2019年には約302haまで減少した（約51%減）。

ゆりの作付面積は、2002年の約869haをピークに減少が続き、2019年には約693haまで減少した（約20%減）。

図表18 主要な品種の作付面積の推移



資料: 農林水産省「花木等生産状況調査」

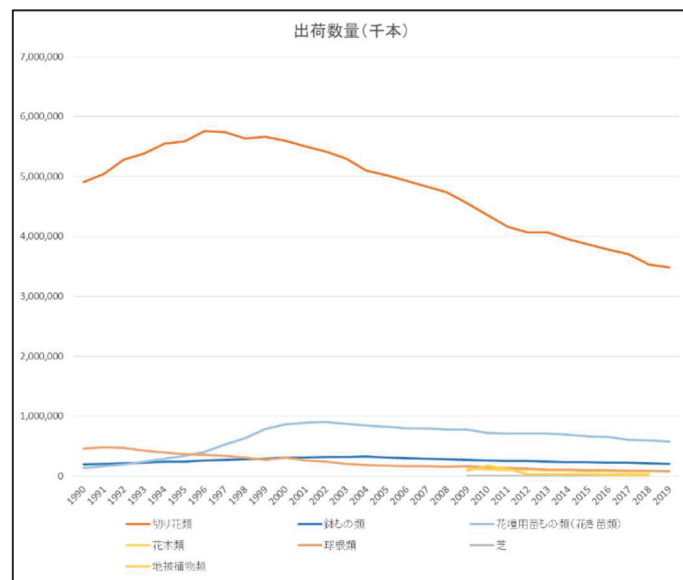
(2) 出荷数量

切り花の出荷数量は、1995年の約5,582百万本をピークとしてその後は減少が続き、2019年には約3,482百万本まで減少した（約38%減）。

鉢ものの類の作付面積は、2004年の約32.4百万本をピークとしてその後は減少が続き、2019年には約20.5百万本まで減少した（約37%減）。

花壇用苗ものの類の作付面積は、2002年の約90.2百万本をピークに減少が続き、2019年には約57.9百万本まで減少した（約36%減）。

図表19 出荷数量の推移



資料: 農林水産省「花木等生産状況調査」

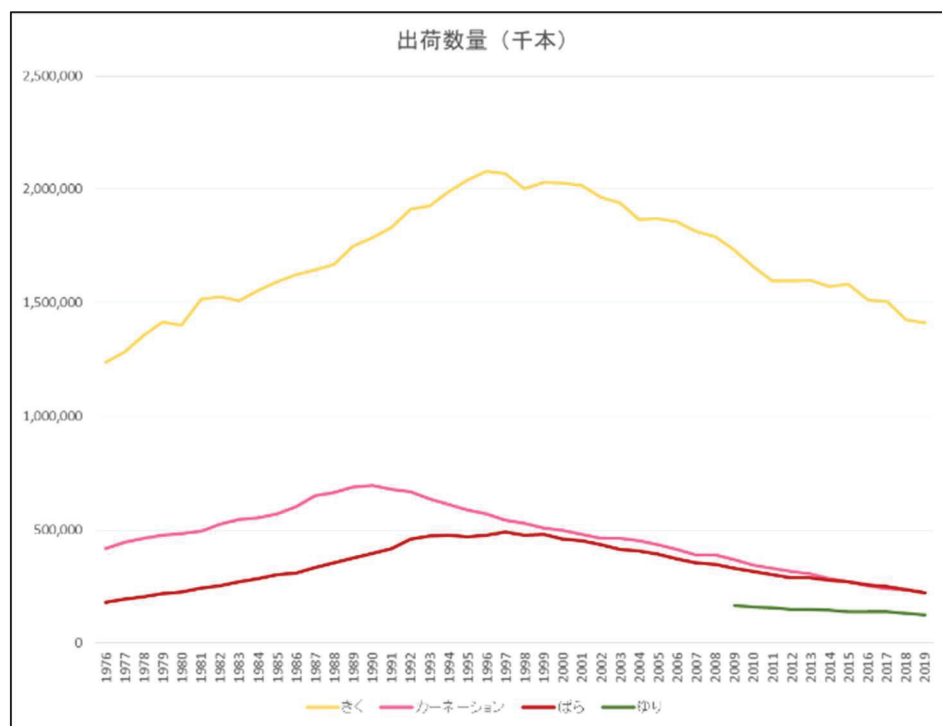
キクの出荷数量は、1996年の約208.1百万本をピークとしてその後は減少が続き、2019年には約141.2百万本まで減少した（約32%減）。

カーネーションの出荷数量は、1990 年の約 64.9 百万本をピークとしてその後は減少が続き、2019 年には約 22.2 百万本まで減少した（約 61%減）。

バラの出荷数量は、1997 年の約 48.8 百万本をピークに減少が続き、2019 年では約 22.1 百万本まで減少した（約 55%減）。

ゆりの出荷数量は、2009 年の約 16.6 百万本をピークに減少が続き、2019 年では約 12.4 百万本まで減少した（約 26%減）。

図表20 主要な品目別の出荷数量の推移



資料：農林水産省「花木等生産状況調査」

（３）流通状況

「卸売業者及び仲卸業者の取引実態調査」によると、2010 年から 2016 年の間に切り花全体の卸売数量は 26.6 億本から 25.4 億本へと 4%減少したが、卸売金額は 1,534 億円から 1,565 億円へと 2%増加した。

販売チャネル別にみると、2016 年の切り花の卸売数量 25.4 億本のうち、花き専門小売店は 8.1 億本で、全体の 32%を占めている。一方、2016 年の切り花の卸売金額は 1,565 億円で、うち花き専門小売店における金額は 469.5 億円と、全体の 30%のシェアとなった。

その他、2010 年から 2016 年の間にカタログ・ネット販売業者や教室・スクール花材業者、葬儀・冠婚業者、ホームセンターにおける取扱数量と取扱金額が伸びている。